

す。このような背景から、遺跡発掘の方法自体を研究し、より良い調査のモデルを作る試みも行われています。学部四年生と修士一年生の夏に参加した福島県楢葉町井出上ノ原（いでうえのはら）遺跡の発掘調査は、遺跡からいかに精緻に情報を得るかを目的とした調査でした。通常は一週間程度で掘り終える縄文時代の竪穴住居に、二ヵ月という時間を費やしてじっくり考えながら掘り進め、私たちが認識している考古資料が、どのような経緯で地中に残され、また発掘されるのかということを、綿密な調査記録から検討しました。またこの調査は、学生を主体とした自炊合宿の形式で行われましたので、同じ釜の飯を食べながら、大学の枠を超えて同年代の学生と交流する貴重な機会でもありました。

ここまで紹介した二つの調査は、私にとって「他流試合」、つまり大学を離れた場での活動でした。これらの現場を通して、様々な人に刺激を受け、また知識と経験を積み重ねてきました。そしてこの他流

試合で得た実力を試す場として、早稲田大学文学部考古学コースの発掘調査がありました。考古学コースの調査は、考古学演習の授業の一環として毎年夏季に行われています。夏季実習調査として私が学部二年生から博士後期課程一年まで携わっていたのが、千葉県印西市戸ノ内（このうち）貝塚という今から約三二〇〇年前の縄文時代後・晩期の集落跡でした。八年間にわたる調査では、最初は先輩に付き従っていたものが、徐々に後輩指導に当たるようになり、最終的にはいくつかの責任を背負うというように、年を経るごとに自身の成長を再確認できる良い現場でした。

はじめに述べたように、研究を行う上では、研究史の整理や資料の実見、また分析など様々なプロセスがあります。また、先輩方や後輩達との繋がりの中から新たな機会や着想が生まれることもしばしばです。しかしそれらを含めても、モノの考え方や扱い方を学ぶ上で、やはり考古学の基本は発掘調査にあると言えます。今年度は千葉

県で古墳、栃木県で縄文時代の集落と、二つの夏季実習調査を予定しています。調査準備の段階で、遺跡をどのように発掘するかということ考えることも、私にとって考古学の愉しみの一つです。

## 〈第二回〉

近世日本の「鎖国」と「通信使」を考える

張 慧 珍

「歴史学と私」というテーマをきっかけに、私ははじめての「日本史」との出会いを思い出した。歴史への関心は、自分の身近なところから始まるからである。その興味や関心から研究という働きにどうつながっていくのかを、自分の事例を通じて話していきたい。

二〇〇二年ワールドカップ日韓共催を契機に、韓国では日本との友好を強調するムードが広がった。韓国の日本学関連学会

では朝鮮通信使への興味が高まり、私も朝鮮と日本の交流に興味を持つに至った。

朝鮮通信使は、一六〇七年から一八一一年まで一二回派遣されたが、その名称は「信を交わる」という意味として名付けられた。朝鮮通信使は江戸まで陸路で行列を組んで移動した。通信使の行列は数百人の規模で、各藩の大名の盛大な接待を受けながら江戸まで上った。通信使行列は百姓まで見学することが許されたので、大きなイシューとなり、その影響は出版物や踊り、歌舞伎、いろいろな祭りなどに反映されている。近世日本の異文化体験が国内で実現できたのである。朝鮮通信使派遣に関わる実務は対馬藩に委ねられており、対馬藩は朝鮮側との外交交渉や江戸までの案内、幕府とのやり取りは勿論、日朝貿易などを担当した。釜山倭館は、日朝外交・貿易の場として用いられた。

朝鮮通信使を琉球使節とともに日本に対する朝貢使節として捉える議論もあるが、これは「鎖国」「海禁」説に関わっている。

琉球使節の派遣は、一六〇九年薩摩藩の琉球侵攻によって実現された。幕府は琉球を異国として位置づけていたので、琉球使節は異国使節として扱われた。江戸上りのルートはほぼ朝鮮通信使ルートと同じで、約一〇〇人規模の行列が中国人の服装をまとい、異国風を演出した。百姓はこの行列を見物することができた。薩摩藩は藩内城下町に琉球館を設置して琉球との対外交渉の窓口として用い、琉球使節の江戸上りを担当した。

そのほか、長崎では唐船を介して中国貿易が、出島のオランダ商館を通じて東南アジア―中国貿易が行われていた。北方をみると、幕府は蝦夷地との交易独占権を松前藩に与えていたが、アイヌは山丹貿易を行っていて、北の中国貿易ルートとつながっていた。松前藩は商場知行制・場所請負制などを設けてアイヌと交易しながら、山丹貿易に間接的につながっていたと言える。

「鎖国」「海禁」の時代に異国との窓口となったのは、朝鮮通信使・琉球使節を管掌

する対馬藩・薩摩藩だけでなく、いわゆる四つの口（対馬藩・薩摩藩・長崎・松前藩）が形成されていた。従って、この四つの口について注意深く検討する必要がある。

しかし従来「鎖国」「海禁」という概念はどう捉えられてきたのか。鎖国という語はケンペルの『日本誌』という論文の一部を一八〇一年志筑忠雄が『鎖国論』と和訳・翻訳したのが初出で、海禁は『徳川実記』が編纂された一八〇九年から四三年の間に定着したと言われている。一九世紀に形成された用語が、近世日本における一貫した概念だとイメージされていると言える。

一九七〇年代以前の研究では対ヨーロッパの視点から「鎖国」論が広く議論された。しかし「鎖国」ははっきりとした概念として使われたわけではなく、現在も幅広い意味を含む。この対ヨーロッパの視点を批判し、一九六七年中村栄孝氏が日中朝関係から「華夷意識・華夷秩序」を考えるべきであると指摘した。以来、近世対外関係史研究は対東アジア視点へ転換していき、朝

尾直弘・田中健夫氏などの研究に基づき、一九八〇年代に荒野泰典氏が「海禁・日本型華夷秩序」論を発表した。近世日本の国際関係は華夷意識・秩序に基づいており、朝鮮通信使と琉球使節の来日を朝貢使節と位置づけて、日本型華夷秩序が成立したとするものである。こうした経緯で、「鎖国」「海禁」という用語が今まで通用しているわけである。

しかし、こうした学説に対しては、木村直也氏・紙屋敦之氏らによる批判がなされている。東アジア・欧米を同時に認識した研究が必要であり、従来の概念に拘らず、時代各段階による徳川外交の変容と実体を検討する必要があるという課題が指摘されたのである。私の博論『一七世紀徳川外交の研究』も、東西世界を視野に入れて脱華夷秩序という視点から徳川外交の見直しを追究した研究である。

日本史研究の方法は、新しい史料で新しい史実を追究することだと考えがちであるが、私のように既存の歴史評価を見直し、

再検討する方法もある。自分の興味のある、知りたいと思う歴史を、もうすこし広げて深めて考えればきっと自分の知らなかった史実にたどり着くことができ、楽しい歴史研究につながっていくことができると思っている。

## 世界における日本の中国史研究

小林 隆道

二〇一二年度、筆者はイギリスのケンブリッジ大学に客員研究員として所属し研究を進めた。その際に、受入教員となっていただいたマクデモット先生やキングス・カレッジ・ロンドンのヴィールドト先生をはじめとした様々な先生方に非常によくお世話をしていただき、短いながら充実した時間を過ごすことができた。

未だに実力も実績も無い筆者がこのような待遇を受けることができたのは、何よりもまず先生方の誠実な人柄によるものであ

る。それは勿論として、それ以外にも、筆者の後ろに存在する「日本が蓄積してきた中国史研究の伝統」に対する敬意が存在したのではないかと思ひ至るようになった。

一般的にはあまり知られていないが、日本の中国史研究の水準は極めて高い。もしアメリカのハーバード大学で中国史を研究しようとするならば、日本語が必修科目となる。それは研究の際に日本語の研究論文を参照する必要があるためである。これは極めて特異な状況と言えよう。このような日本の中国史研究の水準をよく体现する一例として「唐宋変革論」が挙げられる。これは唐後半から北宋にかけて中国史を二分する大変動が起きたとする仮説であり、京都大学の内藤湖南により明治末・大正年間に提唱された。この「唐宋変革論」は国際的に広まり、その後も批判的に継承され現在においても国際学界において大きな影響力を持っている。たとえば、アメリカにおいて近年主張される「両宋画期論」や「宋元明変遷論」はみな「唐宋変革論」を下敷